

第 27 回「環境放射能」研究会にて奨励賞を受賞しました (2026/3/13)

テーマ：災害放射線医学、環境防護、トリチウム

会場：高エネルギー加速器研究機構

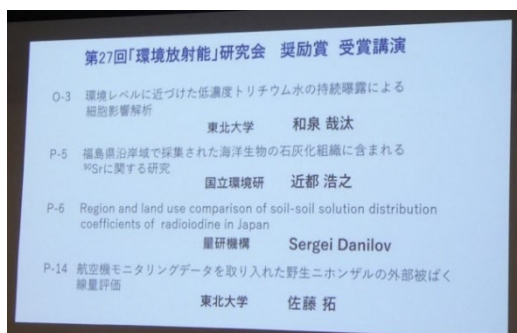
URL：<https://rcwww.kek.jp/enviconf/Award-2026.pdf>

2026年3月11日（水）～13日（金）につくば市で開催された第27回「環境放射能」研究会（高エネルギー加速器研究機構）において、災害放射線医学分野（千田浩一教授）に所属する大学院生の佐藤拓氏と和泉哉汰氏が、奨励賞を受賞しました。本研究会で学生および若手研究者による発表の中から優秀と審査された4名に対して授与されました。

佐藤氏の受賞タイトルは「航空機モニタリングデータを取り入れた野生ニホンザルの外部被ばく線量評価（ポスター）」（佐藤拓、Jiaxin Li、和泉哉汰、本宮響太郎、山下琢磨、木野康志、高橋温、篠田壽、遠藤暁、福本学、鈴木正敏、千田浩一）です。外部被ばく線量は被ばく期間の行動調査と空間線量率から推定することができますが、行動範囲が不明で山奥など空間線量率の測定が難しい範囲を移動する野生動物の被ばく線量を評価する方法は確立されていません。日本では、福島第一原子力発電所から半径 80 km 以内の空間線量率を 2011 年から 2024 年まで毎年測定した記録が公開されており、野生動物の外部被ばく線量評価上の課題を航空機モニタリングデータの利用によって解決しようとする佐藤氏の研究戦略が高く評価されました。また、歯のエナメル質の分析による本法と独立した評価手法による推定結果ともおおむね関連性が見られた結果も評価されました。

和泉氏の受賞タイトルは「環境レベルに近づけた低濃度トリチウム水の持続曝露による細胞影響解析（口頭）」（和泉哉汰、佐藤拓、Jiaxin Li、本宮響太郎、山下琢磨、木野康志、福本学、笹谷めぐみ、鈴木正敏、千田浩一）です。自然発生レベルと区別できる高感度分子マーカーを用いて、低濃度トリチウム水で生じるわずかな継日変化を定量解析し、トリチウムを取り除くと自然発生レベルまで回復することを明確に示しました。さらに、解析に使用した分子マーカーの特性についても知見を深め、マーカーのサイズの変化によって DNA 損傷の修復のしやすさを推定できる可能性を見いだしました。この知見を解析に用いることで、トリチウム水で生じた損傷が修復可能であることを示唆する結果となりました。従来は環境中のトリチウム量から安全性が説明されてきましたが、環境レベルの安全性を確認できる生物学的知見は少なく、和泉氏の発見した新たな視点と合わせて評価されました。和泉氏は昨年度の本研究会に引き続き 2 回目の受賞となります。

授賞式は、本研究会最終日の 2026 年 3 月 13 日に行われました。



受賞者発表時の様子



授賞式の様子

佐藤氏は右端、和泉氏は左から 2 番目

文責：千田浩一、鈴木正敏（災害放射線医学分野）